



77人の侍アメリカへ行く

万延元年遣米使節の記録

レイモンド服部

77人の侍アメリカへ行く

NDC 915 19.4 cm

定価 四九〇円

昭和43年9月20日

第1刷発行

著者

レイモンド・服部^{はつと}

東京都大田区上池上二一七
郵便番号 145

発行者

野間省一

発行所

株式會社 講談社

東京都文京区音羽二一十二
郵便番号 112

電話 東京九四一二二(大代表)
振替口座東京三九三〇

印刷所

豊国印刷株式會社

製本所

株式會社 国宝社

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

目

次

航海日記

出

発

ア	咸	桑 ^サ	咸	ハ	好	大
タ	臨	ン ^ン		ワ		
ラ	丸	フ	臨	イ	奇	し
の	帰	ラ		の		
	航	ン ^ン		休	心	け
海		ス	丸	日		
		コ				

出	門	大
		使
		任
港	出	命

133 124 92 75 58 50 42

27 15 8

滞米日誌

ワシントン
府に
て
二市
訪問
紐育
ニ
ユ
ヨ
イ

257 230 154

帰航

故国へ
帰国

320 288

付録

遣米使節の行程図と日程表
遣米使節団一行の氏名
日米修好通商条約議定書

338 328

参考文献

337

あとがき

338

装丁 稲垣行一郎

見返し カッ ト 桑田雅一

77人の侍アメリカへ行く

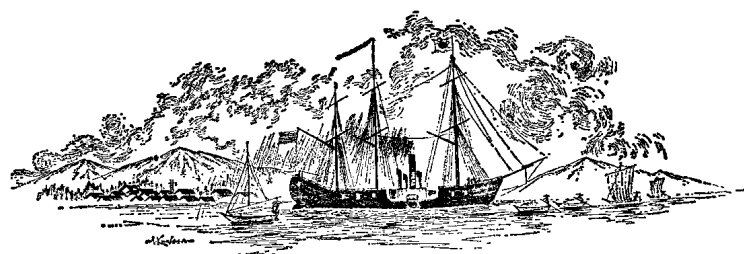
Over the Western sea hither
 from Nippon come,
Courteouss, the swart-cheek'd
 two-sworded envoys,
Leaning back in their open
 barouches, bare headed,
 impassive,
Ride to-day through Manhattan.
 Walt Whitman

From "A Broadway Pageant"

西の海を越えて
 日本から来た
礼儀正しい黒い頬の
 二本刀の使節たち
四輪馬車にゆったりもたれて
 帽子も冠らず落ちついて
きょうこのマンハッタンを通っていく
 ウォルト・ホイットマン
 (ブロードウェイ・
 ページェントより)

出

発



大使 任命——村垣淡路守遣米使節仰せ付けらるるの事

大老の呼び出し

秋晴れのある日のことであつた。

外国奉行兼神奈川奉行村垣淡路守範正は下城して帰宅の途中数寄屋橋にさしかかつてきた。彼の築地の家まではあと七、八町（一町は約一〇九メートル）もない。若党と中間を供につれた淡路守は、馬上いつになく黙々と考えごとをしながらゆつくりと馬を打たせていた。

夕陽が江戸城の上に輝いて、鳥が鳴きながら増上寺の森に帰っていくのが見える。すべてが平和な大江戸の夕暮れであつた。銀座にかかっていると往き來の町人の数が多くなつた。鉢巻きをした子守りが、子どもをおぶって店先で手まりをついている姿も見える。

しかし村垣淡路守は、そんなことはいっさい目にはいらぬらしく、黙然^{もくねん}としても思ひに沈んでいる。彼は当時の日本人としては長身で、五尺七寸（約一七〇センチ）ほどもあつたから、馬上の姿は堂々たるものである。槍を持った中間と若党の侍も、主人の心を推しはかつてこれも深刻な顔をして供をしていた。

淡路守は、きょう江戸城の控えの間でいつものように事務を執っていると、突然、大老井伊掃部頭

直弼なおすけから呼び出された。「新見しんみ豊前守正興ぶぜんのかみまさおき、小栗忠順おぐりただまさ又一とともに上下かみしもを着用して罷り出よ」との命令である。おりから小栗忠順は不在だったので、新見と二人取るものも取りあえず急ぎ桔梗ききようの間に出頭すると、大老井伊掃部頭以下老中列座して厳然と控えている。新見、村垣の兩人は平伏してかしこまった。

井伊大老は声を挙げて、

「即刻の出頭、大儀である。知つてのとおり、このたびアメリカ国との間に修好通商条約のお取り決めがあり、条約の批准書ひつしんをアメリカ国ワシントン府において交換することと相成つた。ついでには汝らなんじご苦労ながらアメリカ国に罷り越し、ご用を勤めてもらいたい。新見豊前守正興朝臣あそんは正使、村垣淡路守範正朝臣は副使、小栗忠順又一は監察の心得にて相勤めよ」

といい渡した。

新見、村垣は恭うやうやしくお受けすると、おのおの複雑な気持ちで控えの間に退いた。この遣米使節任命のしらせは、下城げじようの太鼓の鳴り響くころには、江戸城中だれ一人知らぬ者はないほど知れ渡つていた。

特命全權大使任命の辞令である。いまならだれひとり喜ばぬ者はあるまい。しかし時は安政六年（一八五九）、いまから百年以上前のこと、アメリカへ行つたことのあるのは、難破した漁民くらいのものである。日本の鎖国は徹底したものであった。日本とは昼夜があべこべの地球の向こう側の国、鼻の高い紅毛碧眼の異人の国、そこへ行くには万里の波濤を乗り切らねばならない。海の上にはいかなる怪獣変化かいじふへんの類ながいるかしたるものではない。当時の日本人は海坊主、舟幽霊の存在を信ずるほうが常識であつた。そんな地の果ての国へ行つてはたして無事に帰国することができらうか。いま考

えればまったくばかばかしいこんな心配があたりまえのそのころであつた。

外国奉行の村垣淡路守は、それほど海外のことに無知ではない。彼はアメリカ公使ハリスとの折衝、箱館奉行当時の赤蝦夷ことロシア人との交渉によつて、日本の外交界のベテランと認められていた。ゆえにアメリカへ行くことはさほど気にならないのだが、条約の批准交換という日本開国以来の大任を思うと、気が重くなるのであつた。

彼は先代村垣淡路守定行の長男として生まれた。二千石の旗本の長男であるが、当時の慣習によつて二十歳のとき新規お召し出しの形式で二十人扶持のお庭番となつた。その後、累進して淡路守に任官し、従六位に叙せられたのはまったく彼の勤勉な働きによるもので、四十七歳の彼は有能な幕吏として、幕府のお覚えもめでたかつたのである。真面目な彼はこのたびの大役に気が重くなつた。小心翼翼として勤める型の彼は「四方に使して、君命を辱かしめず」という支那の諺がしきりと思い出されて、なんとも心が沈んでくるのであつた。「しかしお受けした以上もはやご辞退などできぬし、思えば男子と生まれて、一国を代表して五大州にその名を知られるとは家門の面目これに過ぐるものはない。実にありがたいご誼である。今日こそわが人生の最も晴れ晴れしい日だ。喜ばしいこの日に気が滅入るとは愚かなことである」と自ら氣を引き立ててはみるが、しかしまた「自分の器量でこの大役がみごと果たせるものであろうか。正使の新見豊前はご近習のいわば箱入り息子、すべては自分が取り仕切らねばなるまい。すべてが自分の責任になるわけだ」そんな氣がむくむくと持ち上がつてきて、浮かぬ顔をしたまま築地のわが家にはいつていった。

送別の宴

「お帰りのい」若党吉田從二郎の声に門は颯と八文字に開かれる。玄関には妻の柳子がしとやかに手をついて、「お帰りなさいませ」と迎えている。

「ただいま戻った」

淡路守はそのまま馬を若党に預けて奥の居間へと通った。いつもそのまましばらくくつろぐのが例で、大小を妻のお柳に渡すと、床の間の前の分厚い座布団の上に坐る。小間使いの喜佐が持ってきた茶をいれると、淡路守はゆっくりと煎茶の出花を味わっている。刀掛けに大小を掛けた柳子は、

「お疲れでございましたでしょう。承りますれば……」

ここまでいったとき、お柳はもう泣き顔になってぼとりと涙が一滴こぼれてきた。このお齒黒もつやつやしい年増盛りの武家の妻には、こぼれるばかりの色気が溢れている。

「もう知っておるのか。左様、今日ご城中でご大老よりアメリカ国へお使いの仰せを承った。しかし安心するがよい。異人どもも常に往き来していることゆえ、案ずることはない。それより数多い旗本の中でお見出しにあずかり、かかる大役を仰せつけられるとは男子の面目これに過ぐるものはない。喜んでくれ。いやさっそくご先祖にこの喜びをご報告いたさねばならぬ。そのような泣き顔をしてはおかしいぞ。めでたいことではないか」

淡路守は愛情のこもった視線をお柳の顔にやるのであった。

「ハイ。ご仏間のご用意をいたしてまいります。しかしあまり遠い所なので」

お柳はむりに笑みを浮かべると涙をふり払って立っていった。

村垣家のいい伝えによると「家の女たちはみな泣き崩れて悲嘆にくれた」と、著者はよく父から聞いたものだった。

今ならひと飛びで行けるアメリカも、当時の人にとっては、月の世界へでも行くのと同様に思われたのである。

日が暮れると十六夜の月が晴れた夜空に皎々と照り渡った。毎年の例として、この夜は月見の宴をするならわしとなっているが、ことにこのたび大命を仰せつけられたことははや隠れもないことなので、一族、知人よりもお祝いの人が集まり、盛大な酒宴となった。送別の和歌、漢詩もぞくぞく寄せられてきた。淡路守もお柳も人々の祝辞を受けて、ほんとうにめでたいことなのだという実感が湧いてきた。淡路守は人々から祝盃を受けて陶然とするともに、先ほどの男子の本懐という気持ちになつてきたし、お柳も祝いの客の接待に小間使いの指図をしながら、有能な夫を持った妻の喜びにひたつていたのである。

將軍シヨック死

一六三九年、三代將軍徳川家光が鎖国政策をとり、日本人の海外渡航、オランダ人、中国人以外の外国人の来日禁止をして以来、二百年にわたつて東洋の一隅に安眠をむさぼつていたわが日本に開国の暁鐘を打ち鳴らしたのは、アメリカの水師提督マッシュ・ペリーであつた。

一八五三年七月八日、開国を要請するフィルモア大統領の親書をたずさえたペリー提督は、旗艦サスケハナ号以下四隻の艦隊をひきいて、突然三浦半島の浦賀沖に姿を現わした。

「黒船来たる」

天下は挙げて騒然となった。

時の將軍十二代家慶は六十一歳の老人であつたが、びっくり仰天、「大いに驚き、おふるえ遊ばされ、お熱出で今もって御病氣の由」と当時の記録にある。

征夷大將軍がこのありさまだから、旗本八万騎以下江戸町人が慄え上がったのもむりがない。

百人一首をもじって、

顔の色は変りにけりな異な面と

アメリカ人を眺めせしみに

という落首がこの当時の有様をよく物語っている。

太田蜀山人の有名な、

太平の眠りを覚ます蒸気船（お茶のク上喜撰々とかけてある）

たった四杯で夜も眠られず

もこのときのことだ。

ペリー提督は幕府に大統領の書簡を渡すと、来年の春返事をとりに行くといっていちおう引きあげていったが、將軍家慶はショックから立ち直れず、とうとう死んでしまった。

翌年二月、ペリー提督は八隻の軍艦、二隻の補給艦をつれてふたたびやってきた。四隻の軍艦でさえびっくりしたのだから、このたびの大艦隊には江戸幕府はまったく圧倒されてしまって、いやいやではあったが神奈川条約を結び、下田と箱館（いまの函館）の二港を開くことを承諾した。ここに二百年来の鎖国は破れたのであった。

神奈川条約によれば、アメリカは下田に領事を駐在させることができる。

この条約によって下田の玉泉寺に來任したのが、唐人お吉で有名なタウンセンド・ハリスである。

ハリスは頑迷な徳川幕府を相手に苦心慘憺、ついに一八五八年七月二十九日、横浜の小柴沖に投錨中の米艦ポウハタン号上で日米修好通商条約を調印することに成功した。このポウハタン号が一八六〇年、村垣淡路守らをアメリカまで送ることになるのである。

さてこの日米修好通商条約の第十四条には、「日本政府（徳川幕府）は使節を派遣しワシントンにおいて批准交換を行なう」という一項がある。このたびの新見豊前守、村垣淡路守、小栗豊後守らの派遣は、この第十四条によるものであった。